

社会技術研究開発事業
令和5年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による
孤立・孤独防止事業」

虫明 元
東北大学 大学院医学系研究科 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2-1. 研究開発目標.....	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン.....	3
2-3. ロジックモデル.....	4
2-4. 実施内容・結果.....	5
2-5. 会議等の活動.....	19
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	19
4. 研究開発実施体制.....	20
5. 研究開発実施者.....	22
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	23
6-1. シンポジウム等.....	23
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	23
6-3. 論文発表.....	24
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	24
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	24
6-6. 知財出願（出願件数のみ公開）.....	25

1. 研究開発プロジェクト名

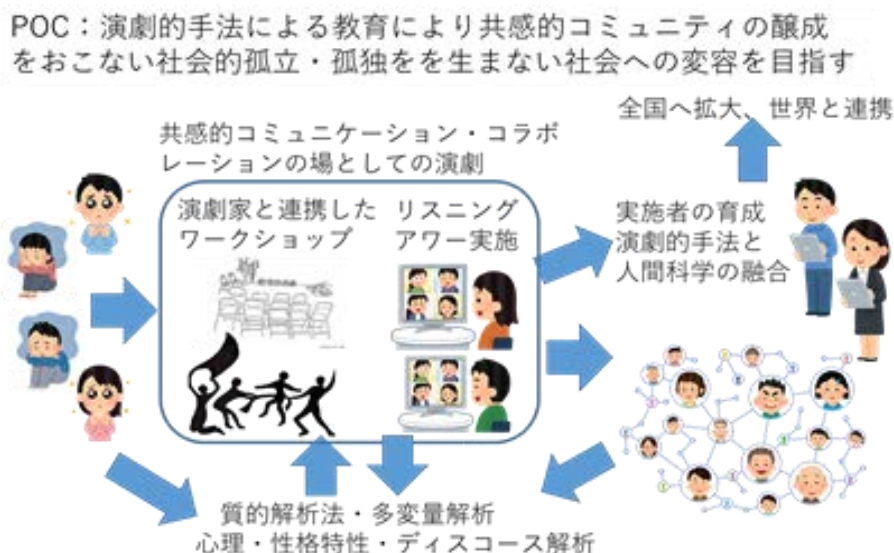
演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

スモールスタート期間では、地域の学校、大学、具体的には東北大学と宮城教育大学においてPoCの実践を行い、応用演劇と科学的人間理解を組み合わせた共感的コミュニケーション能力アップの授業を地域の演劇集団PLAY ART! せんだい、また全国の広いコミュニティに繋がりのある即興再現劇（プレイバックシアター）の関係者と企画を立案し、協働して実践を行う。そしてプロトタイプとなる活動を構築実践する。応用演劇のほか、プレイバックシアターが昨年のコロナ禍で開発した互いの経験したストーリーを語り合うリスニングアワー（LH）の活動も、互いが遠隔であってもできる活動であり、コロナ禍で対面、遠隔 ハイブリッドのいずれにも対応できるコミュニケーションワークショップを目指す。性格特性調査、参加者のフィードバックも含めながら多角的評価を行い、孤立・孤独と社会情動性スキルとの関連性を解明する。また人間形成に関わる質的調査も同時に行う。プログラムに関してはPDCAサイクルを繰り返しながら改善する。

本格研究開発では、全国にいる即興再現劇の団体、リスニングアワー（LH）のガイドの資格の有る人を含めて、演劇関係者とのネットワークを活用しつつ、大学との連携を図り全国での活動展開を目指す。実は即興再現劇の団体は、北海道から沖縄まで全国の主要都市に存在するが、東北地区にはまったくない。ただ、仙台は劇都を標榜する都市でもあり、コミュニティには潜在的に演劇に関わる人材も多い。大学教育の中に演劇的手法を導入し、東北にも応用演劇による教育を根付かせ、さらに様々な分野でニーズのあるコミュニティに出前でワークショップを行っていく。教員を対象とする公開講座や県教育センターにおける研修を行い、実践者の育成を行う。応用演劇と教育との連携を様々なコミュニティに関して導入を広げる。そしてプロトタイプの活動モデルをコアにして全国の大学や関係者と連携することで大きな社会変容を目指していく。即興再現劇の持つ国際的なネットワークも活用すれば孤独・孤立への対応について、国際比較しながら研究を進める。

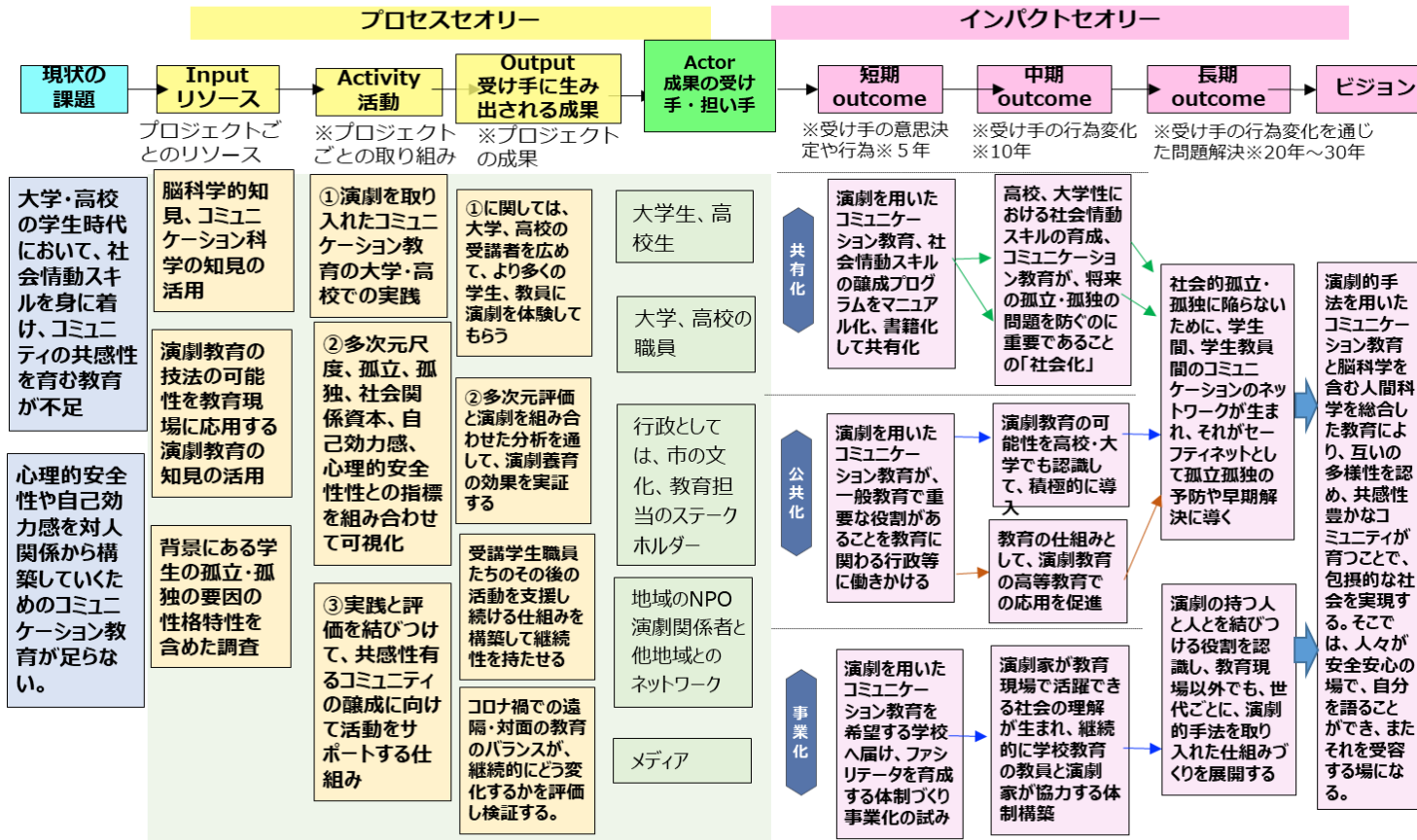


2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. 大学における孤立・孤独の現状と関連する多次元指標との関係性はなにか？
- Q2. 演劇的手法にはどのようなものがあり、グループの孤立・孤独と関連する社会情動性の指標にどのような効用や変化が認められるのか
- Q3. リスニングアワーと呼ばれる、各自の経験を話す遠隔での活動の孤立・孤独への影響はどのようなものか？
- Q4. 演劇的手法の教育を受けた人の長期的な変化はどのようなものがあるのか？
- Q5. 教育現場に演劇的手法を取り入れていくときの、演劇というイメージが教員等の抵抗を生むボトルネックは、どのようにすれば解決できるのか
- Q6. AI等の新しい技術は対面での演劇的手法の学びとは違う、ないしは、互いの連携できる学びになりえるのか？

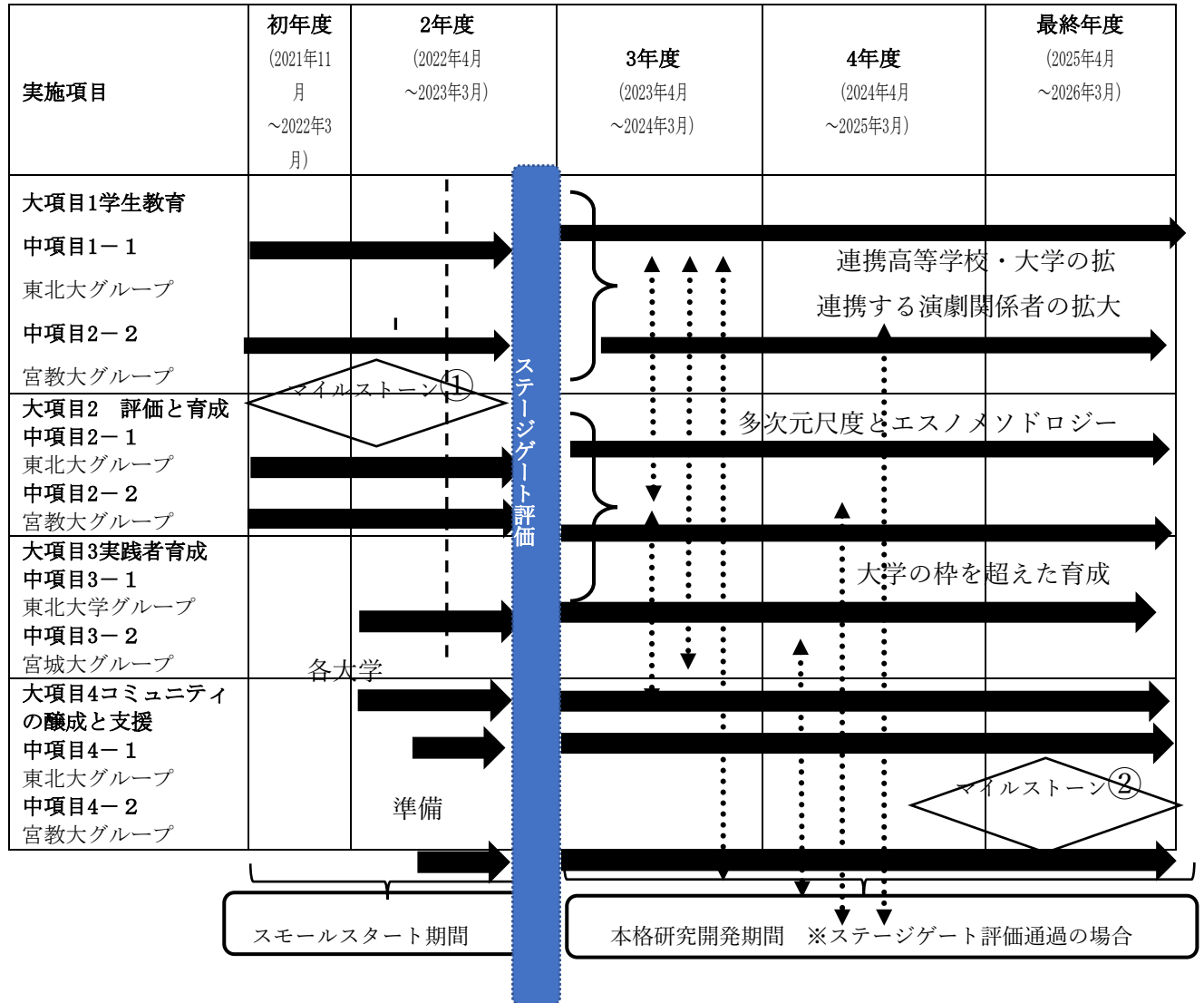
2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築) 「演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業」ロジックモデル



2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



リスクヘッジ：項目1、3についていえば、学生の参加人数はワークショップの効果にも大きく関わることなので、過不足ないように適宜人数調整する。項目2は、質的調査に関することになるが、言葉そのものの分析を行うとともに、テキストマイニング等の質的研究手法も分析方法として検討する。項目3については継続性が保てるように前の実践者のグループから次の実践者への橋渡しをする。項目4は、コミュニティの対象の数や規模を調整する。ワークショップの実施対象を教育関係に特化しつつ、障害のある人へのケアの教育、福祉分野への教育などへと範囲を広げ、孤立・孤独に陥りやすいコミュニティへのコンサルティング等を行いながら調整する。

マイルストーン② 演劇的手法を用いたコミュニケーション教育によりコミュニティの共感性を育むプログラムを、ニーズのあるコミュニティに届けられるようにし、評価と分析によるエビデンスをもとに各コミュニティの醸成と支援が展開できるようにする。

(2) 各実施内容

令和5年度における研究開発の内容・進め方

■実施項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

実施内容：東北大学の一年生を対象とした全学教育の授業において、令和5年前期(2023年4-7月)の「多文化間コミュニケーション」では、PLAY ART!せんだい(5/15, 22)、及びプレイバックシアター(6/24, 25)によるワークショップを実施した。後期の「多文化PBL」では、聾啞の演劇家である庄崎隆志氏のワークショップ(10/16)、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(10/23)を、虫明元・虫明美喜担当する「演劇的ワークショップ」の一環として行った。
リスニングアワーと呼ばれる遠隔で行う互いの経験を話す場を、上記の「多文化間コミュニケーション」では5回(2023/5/18, 6/1, 15, 22, 7/6)行い、「多文化PBL」では4回(11/21, 12/5, 7, 12)オンラインで行った。小森亜紀がリスニングアワーのガイドをつとめた。代表者虫明元、または虫明美喜が学生と共に参加し、その場のサポートを行った。

◎中項目1-1 東北大学全学教育における社会情動スキルと向社会性の育成

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明元(東北大学・教授)

対象：大学初年次学生

東北大学全学教育の学生を対象として、学部横断的な社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなった。宮城教育大学の虫明美喜、プレイバックシアター、PLAY ART!せんだい、庄崎隆志、里見まり子らと連携して実施した。

◎中項目1-2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

期間：令和5年4月—令和6年3月31日 実施者：虫明美喜(宮城教育大学・客員准教授)

対象：宮城教育大学学生

教育を目指す学生を対象として、外部講師との連携では、聾啞の演劇家の庄崎隆志氏のワークショップ(10/12)、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(10/21)を行い、さらにこの2つのワークショップに関しては、庄崎隆志氏のワークショップ(10/13)、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(10/22)で一般公開ワークショップとしても開催した。また、初年次学生を対象としたコミュニケーションワークショップを、国語教育担当の遠藤仁教授との協力のもとで、虫明美喜・虫明元が実践者として行った(10/18)。

■実施項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

実施内容：孤立・孤独の評価方法に関して多元的な評価の尺度を検討し、背景にある孤立・孤独の原因を解明した。

◎中項目2-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明元(東北大学・教授)

対象 主に一般初年次学生

宮城教育大学グループ+プレイバックシアター+PLAY ART!せんだいと連携して行った授業に関して、性格特性、孤独、孤立指標としてUCLAの孤独感尺度、孤立に関してはルーベンのソーシャルネットワーク尺度、その他の指標も加えた指標間の関連性を統計的に分析した。前期は孤独感、家族交流、知人交流尺度、クラス内知人、社会関係資本(ネットボンド、ネットブリッジ、リアルボンド、リアルブリッジ)一般効力

感(学力と関係)、社会効力感(対人関係)、愛着不安(対人関係不安)、愛着回避(対人関係回避)、共感化(心を読む力)、システム化(メカを理解する力)、心理的安全尺度(なんでも言える環境)、心理的安心感(安心できる環境)、4F-Fawn(対人ストレス:おもねる)、4F-Freeze(対人ストレス:凍ってしまう)、4F-Flight(対人ストレス:回避する)、4F-Fight(対人ストレス:戦う)、O(開放性)、C(誠実性)、E(外向性)、A(調和性)、N(神経症傾向)、Anger(怒りの情動)、Care(ケアの情動)、Fear(脅威の情動)、Play(遊びの情動)、Sadness(悲しい情動)、Seek(希求、期待)、ジェネラティビティ、内言型、およびBEVIと呼ばれる国際尺度も後期に導入した。

◎中項目2-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

期間: 令和5年11月—令和8年3月31日

実施者: 虫明美喜(宮城教育大学・准教授)

対象: 教育を専門とする学生に対して、東北大学グループ+プレイバックシアター+PLAY ART! せんだいグループが連携して行った。ノンバーバルコミュニケーションの庄崎隆志氏のワークショップ、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ、バーバルとノンバーバル両面からの演劇手法を用いたPLAY ART! せんだいグループのワークショップ、さらに個人の体験したストーリーを演じるプレイバックシアターの演劇手法を比較して、それぞれがどのような社会情動性スキルを育成し、彼らの社会的コミュニケーション能力の育成に資するかを検討する。教育を目指す学生を対象として、社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなう。教育に活かせる演劇的手法を用いたワークショップによる教育方法の確立を行い、情報を共有する。

■実施項目3: コミュニティを指向した教育実践者・ファシリテーターの育成

実施内容: 大学横断的に、特に若手教員や学生のうち、他を指導する立場に将来なりうる人々へ、集中的にコアとなるスキルを身につける演劇的ワークショップ(9/2, 3, 4), (3/9, 10, 11)、また、ワークショップの司会となる役(コンダクター)となるための演劇的ワークショップ(3/2, 3, 4)を開催し、仙台圏の学生、教員がこれに参加した。また、これまでこのようなワークショップに参加してきた学生、教員に声がけをし、継続的に練習会を実施し、対面では平均月一回のペースで、また対外的な公演・ワークショップがあるときにはオンラインでも、年間を通じて練習会を実施し、虫明元・虫明美喜が指導を行った。その中で、これらのメンバーがワークショップ実践者として、グループによる公演(ワークショップ)を行った(4/29「自発性」ワークショップにおける公演、10/29宮城県仙台向山高校学生向けワークショップ、11/12「多文化PBL」学生向け公演、2024/2/17香川医療保健大学学生および教員を対象としたワークショップおよび公演)。

◎中項目3-1 東北大学での実践者としての社会情動スキルの育成

期間: 令和5年4月—令和8年3月31日

実施者: 虫明元(東北大学教授)

対象: 東北大学およびその他仙台圏大学生および教員

演劇的手法を用いたコミュニティ醸成のためのファシリテーターとなる人材育成を目指し、応用演劇の手法を学ぶコアトレーニングの会場としては東北大学で実施したが、募集等を含め事務局として宮城教育大の虫明美喜が募集とりまとめ、及び実施を支援した。

◎中項目3-2 宮城教育大学での公開講座における社会情動スキルの育成

期間: 令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明 元（東北大学）虫明美喜（宮城教育大学）

対象：教育に関心のある教育関係者

教員に関心のある人々への演劇フォーラムとして、2024年3月10日に仙台青葉公園、緑彩館にて行った。参加者は県外、山形からも参加者がおり、市内の高校教員、その他教育に関心のある市民、更には仙台子供財団の理事になった湯浅誠氏と虫明元が対談を行った。

■実施項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤立・孤独化防止推進

実施内容：ニーズのある様々なコミュニティに対して、応用演劇の演劇実践者との連携体制を作り、応用演劇の全国的なネットワークを活用して、共感性あるコミュニティを醸成することにより、人々のつながりを育み、孤立・孤独を防止する事業へと発展させる。大学生の授業の中ではリスニングアワーが孤立孤独に効果があることが、判明してきたので、全国のリスニングアワーのガイドで参加できそうな方に声をかけて、拡大版のリスニングアワーを全国で行った。また他地域の大学でも、演劇的ワークショップを行い、分野や大学の枠を超えての大きなコミュニティの醸成に資する活動を行った。

◎中項目4-1 演劇的手法を用いた包摂的コミュニティの醸成と支援

期間：令和5年4月—令和8年3月31日

実施者：虫明 元（東北大学・教授）虫明美喜（宮城教育大学・准教授）

対象：ニーズのある教育機関やコミュニティ

実施にはプレイバックシアターとの連携により、他地域の学校やコミュニティでリスニングアワーを用いて人とのつながりを醸成しようとしているグループに対して、支援することで活動を他地域へ拡大した。具体的には、2023年10月～12月までに、日本全国にいる10人のガイドが1回ずつリスニングアワーを実施した。リスニングアワーの参加者としては、各ガイドが持つ子育て支援やコミュニティ支援のフィールドを中心に集め、すべてのセッションを「つながり」「仲間」など共通のテーマで実施できるようコーディネートし、実践を支援した。

◎中項目4-2 演劇的手法を用いた教育関係コミュニティの醸成と支援

実施者 虫明美喜（宮城教育大学・准教授）

対象 ニーズのある教育関連のコミュニティ

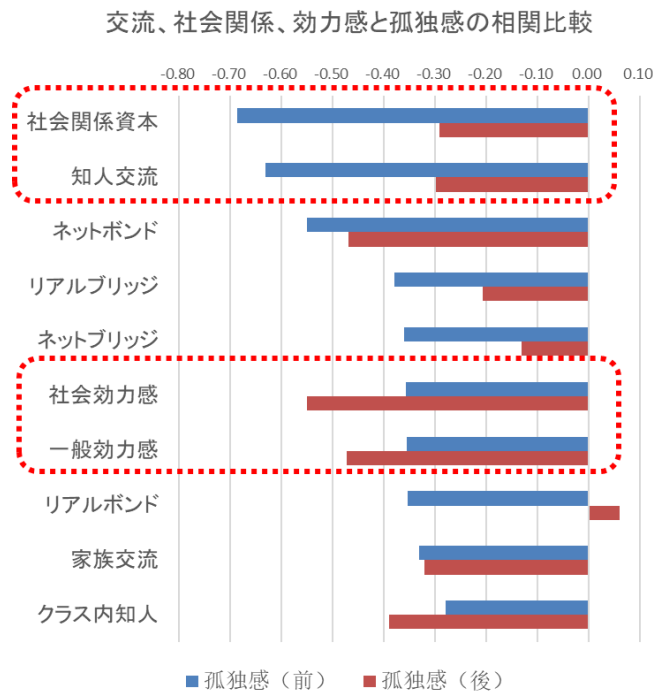
実施には宮城教育大学が、プレイバックシアター+PLAY ART! せんだいと連携して、他の地域でも演劇を医療関係者の育成に役立てる活動に関心のある人たち、今年度は香川医療保健大学に、このプロジェクトで育成した若手の学生、職員をファシリテーターとして送り込み、演劇的手法によるワークショップを開催した（2024/2/17 香川医療保健大学）。また日本小児精神神経学会において、愛着とメンタライゼーションというテーマで、プレイバックシアターのグループが行っている、演劇的手法を用いた参加者（医師、教育関係、保健師、看護師等）に講演した。また公演のデモンストラーションも行った（11/25）。高校に対しては、宮城県仙台南山高校（5/23）、宮城県東松島高校（4/26、5/12、6/28、7/12、12/15、2024/1/31）、宮城県仙台第一高等学校高校（7/24・25、12/25・26・27）、育英学園高等学校（11/4、11/18）を中心に、演劇的手法の授業を各校でのカリキュラムの一環として組み込めるように支援を進め、PLAY ART!せんだいと協力し、虫明・虫明自身も講演やワークショップの講師を務めた。

(3) 成果

■実施項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

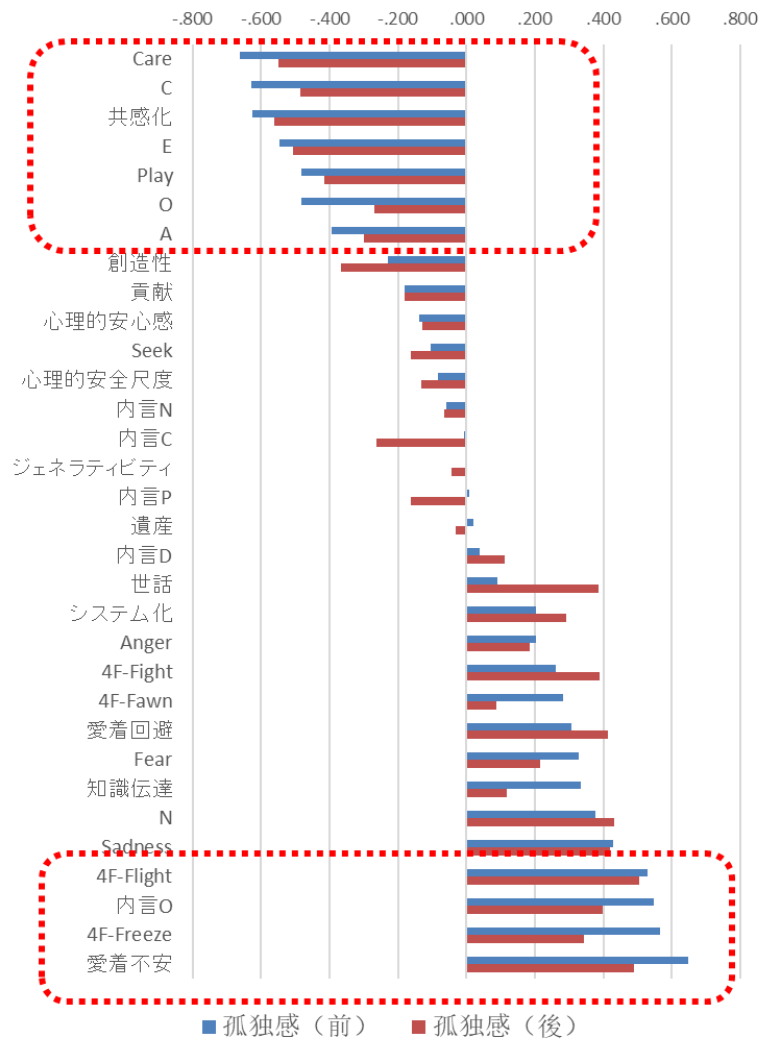
実施成果：令和5年度前期（2023年4-7月）の「多文化間コミュニケーション」では、PLAY ART!せんだい（5/15, 22）、及びプレイバックシアター(6/24, 25)によるワークショップを実施した。後期、多文化PBL（10月ー1月）、聾啞の演劇家の庄崎隆志氏のワークショップ(10/16), 里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ（10/23）および、リスニングアワーと呼ばれる遠隔で行う互いの経験を話す場を「多文化間コミュニケーション」では5回（5/18、6/1、6/15、6/22、7/6）行い、「多文化PBL」では4回（11/21、12/5、12/7、12/12）行った。これらの実践を通して、演劇的手法の違いについても学生からのフィードバックから明らかにできた。

◎中項目1ー1 東北大学全学教育における社会情動スキルと向社会性の育成



演劇的手法を用いた授業前後での比較では、孤独感に関わる因子の変化が認められた。授業までは、社会関係資本と知人交流が孤独感と関係が深かったが、授業後では、社会効力感、一般効力感とが相関していた。これは、交流と孤独が反比例する一般傾向が授業前の状態では認められたが、授業後は、それらはむしろ因子としては影響力はへり、むしろ授業で身についた自己効力感の度合いに個人差があるため、それが孤独感に反映していると考えられた。

孤独感と他の因子の相関の変化



その他の多くの性格特性因子と 孤独感の相関を前後で比較した。各因子の詳細は割愛するが、全般に性格特性と孤独感低下の相関は弱くなる傾向が見られた。これまでも同様の所見を得ている。この意義は、元来性格特性は、孤独感に対して、促進因子、抑制因子があるのだが、授業後さまざまなスキルを身に着けると、そのような性格の因子が影響を受けにくくなると考えられる。これは、演劇的手法の教育の一つの意義として捉えることができるのではないだろうか。すなわち、社会情動性を醸成する演劇教育を導入することで、個人の特性を超えて、孤独感に対してレジリエンスを獲得できると考えられる。

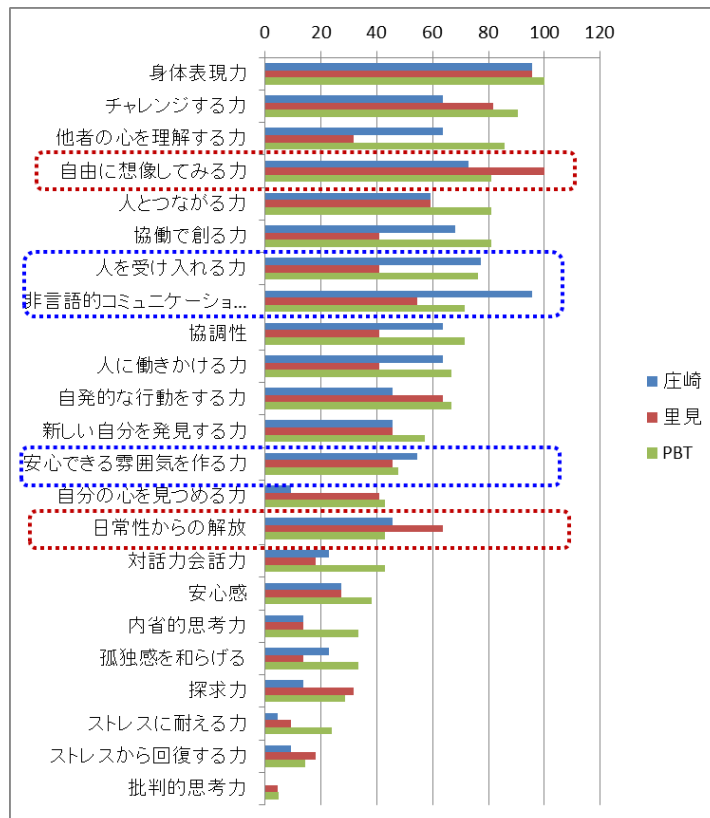
孤独感の前後変化と他の因子

	孤独感1		孤独感1	孤独感2		孤独感2	
孤独感1	1.000	Fawn	-0.048	孤独感2	1.000	Fawn	-0.189
愛着回避	.285	Freeze	-.396	愛着回避	.495*	Freeze	-.390
愛着不安	.060	Flight	.437*	愛着不安	.254	Flight	-.347
ネットボンド1	.786**	内言C	-.254	ネットボンド2	-.112	内言C	-.132
ネットブリッジ1	.149	内言E	.136	ネットブリッジ2	-.094	内言E	.233
リアルボンド1	-.180	内言N	-.153	リアルボンド2	-.290	内言N	-.332
リアルブリッジ1	-.377	内言O	-.164	リアルブリッジ2	-.416*	内言O	-.104
社会効力感1	-.271	内言P	.176	社会効力感2	-.275	内言P	-.136
自己開示1	-.197	内言D	.160	自己開示2	-.645**	内言D	-.162
一般効力感1	-.475*	Anger	.095	一般効力感2	.212	Anger	.353
知人交流1	-.633**	Care	-.411*	知人交流2	-.447*	Care	-.376
家族交流1	-.014	Fear	-.200	家族交流2	-.251	Fear	-.243
		Play	-.234			Play	-.253
		Sadness	-.110			Sadness	-.222
		Seek	-.416*			Seek	-.167

多文化PBLにおいての前後比較でも、孤独感と他の因子との相関関係が前後で変化した。特徴的なことは自己開示ができるようになることが、孤独感の低下と関係していた。他の性格特性と孤独感の関係低下も今回も認められた。

◎中項目1－2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

聾啞の演劇家の庄崎隆志氏のワークショップ(10/12)、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(10/21)をおこない、さらにこの2つのワークショップに関しては、庄崎隆志氏のワークショップ(10/13)、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ(10/22)で一般公開ワークショップとしても開催して、プレバックシアターとの比較評価を行った。



庄崎氏のワークショップでは非言語コミュニケーションと人を受け入れる力に効果があったと評価する学生が多かった。また里見氏の即興ダンスのワークショップでは、想像力の発揮、日常性からの解放という点で評価が高かった。その他の評価は、プレイバックシアターが概ね高かったが、特に他者の心を理解する力、人とつながる力、協働性に関して高い評価が認められた。

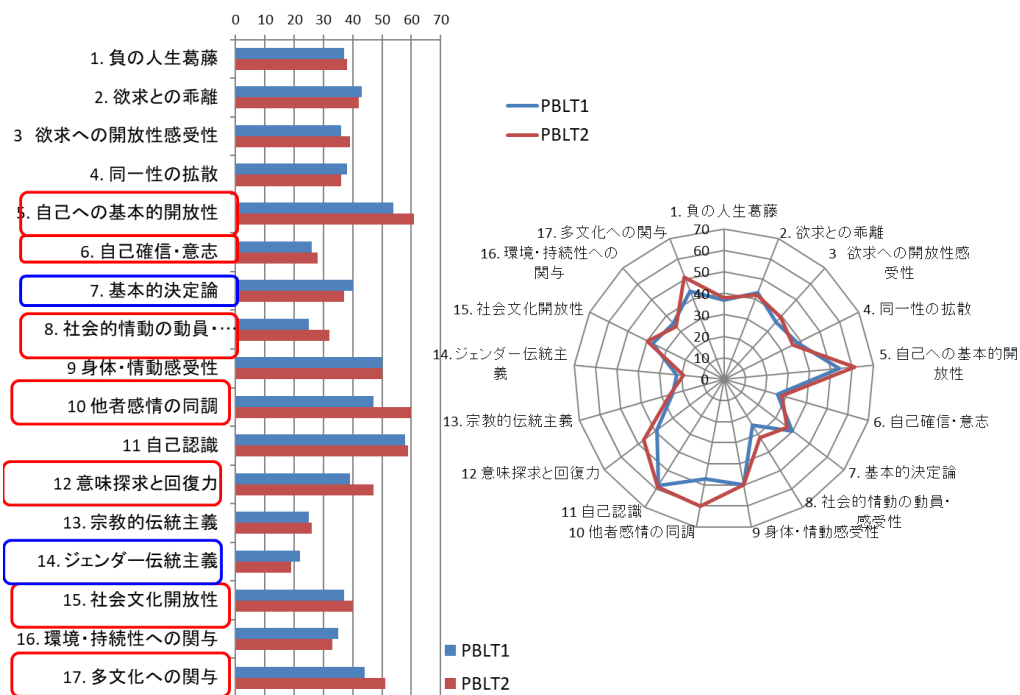
■実施項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

実施内容：孤立・孤独の評価方法に関して多元的な評価の尺度を検討し、背景にある孤立・孤独の原因を解明した。

◎中項目2-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発

演劇的手法を用いた授業に関して、BEVIと呼ばれるグローバル・コンピテンシーを調べる国際尺度を東北大学歯学部の中野遼子教員の協力を得て導入した。

BEVIの前後2回に行った尺度の比較

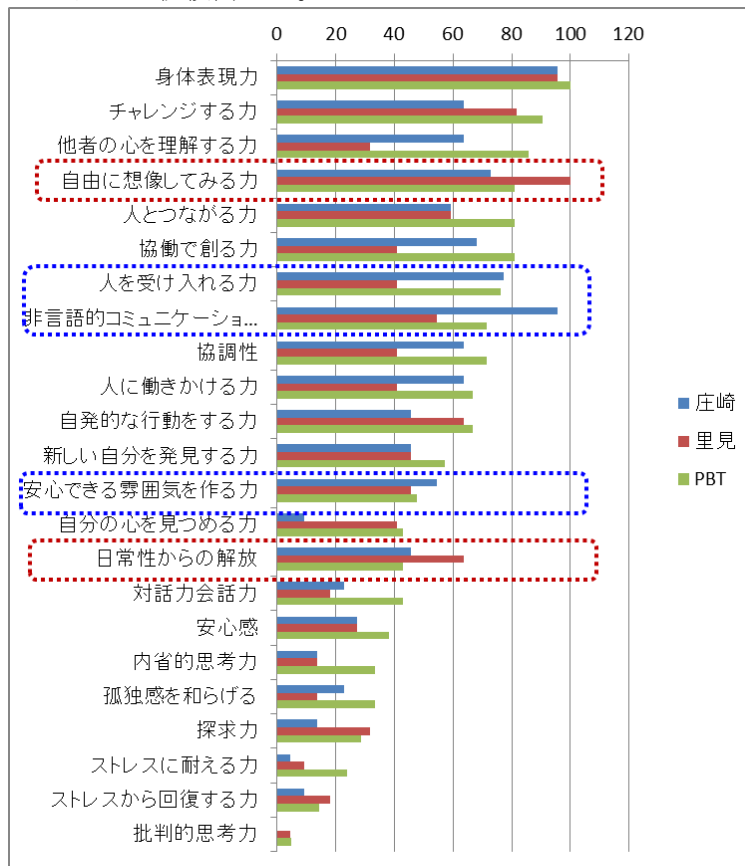


孤独感の前後値とBEVIの前後2回との相関比較

孤独感1		孤独感2	
1. 負の人生葛藤	0.51*	1. 負の人生葛藤	-0.01
2. 欲求との乖離	0.49+	2. 欲求との乖離	0.03
3. 欲求への開放性感受性	0.37	3. 欲求への開放性感受性	-0.66**
4. 同一性の拡散	0.39	4. 同一性の拡散	0.10
5. 自己への基本的開放性	0.74**	5. 自己への基本的開放性	-0.02
6. 自己確信・意志	-0.04	6. 自己確信・意志	-0.26
7. 基本的決定論	-0.15	7. 基本的決定論	0.10
8. 社会的情動の動員・感受性	-0.05	8. 社会的情動の動員・感受性	-0.64**
9. 身体・情動感受性	-0.06	9. 身体・情動感受性	-0.12
10. 他者感情の同調	0.03	10. 他者感情の同調	-0.49+
11. 自己認識	0.14	11. 自己認識	-0.56*
12. 意味探求と回復力	0.07	12. 意味探求と回復力	-0.55*
13. 宗教的伝統主義	-0.07	13. 宗教的伝統主義	0.23
14. ジェンダー-伝統主義	-0.12	14. ジェンダー-伝統主義	0.27
15. 社会文化開放性	0.18	15. 社会文化開放性	-0.73**
16. 環境・持続性への関与	-0.29	16. 環境・持続性への関与	-0.50+
17. 多文化への関与	0.16	17. 多文化への関与	-0.70**

◎中項目 2-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

学生に実施したプレイバックシアター、ノンバーバルコミュニケーションの庄崎隆志氏のワークショップ、里見まり子氏の即興ダンスのワークショップ、に関して、学生評価から、それぞれの手法を比較検討した。



■実施項目3：コミュニティを指向した教育実践者・ファシリテーターの育成

実施結果

◎中項目3-1 東北大学での実践者としての社会情動スキルの育成

大学横断的に、特に若手教員や学生を指導する立場になりうる人々へ、集中的にコアとなるスキルを身につける演劇的ワークショップ(9/2, 3, 4)、(2024/3/9, 10, 11)を行った。またワークショップの司会(コンダクターとなるための演劇的ワークショップ(3/2, 3, 4))を開催した。このプロジェクトで育った学生ファシリテーターによる自主的な公演やワークショップを行い、活動の意義を教育に関心のある参加者に知ってもらう機会とした(4/29「自発性」ワークショップ, 10/29宮城県仙台南山高校、11/12「多文化PBL」学生向け、2024/2/17香川医療保健大学)。各公演ワークショップのために、練習会等を行った。

4/29 @jonathan fox 自発性ワークショップ



2024/2/17香川医療保健大学



演劇的ワークショップ(9/2, 3, 4)



演劇的ワークショップ(3/9, 10, 11)



◎中項目3-2公開講座における社会情動スキルの育成

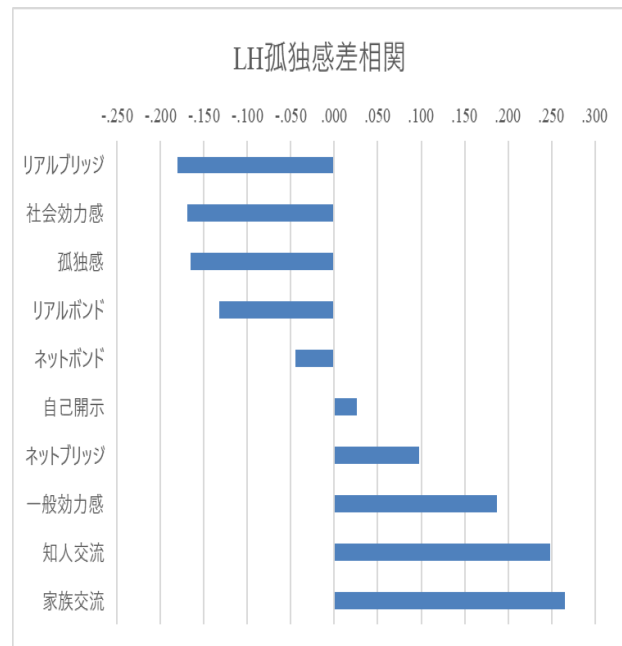
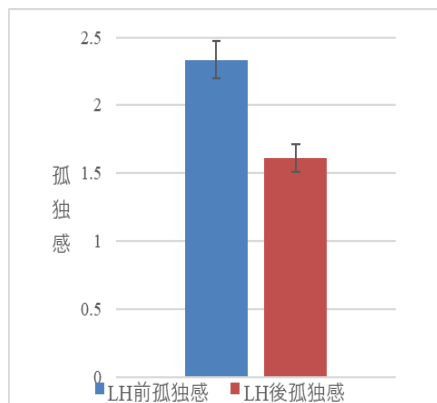
PLAY ART! せんだい主催で、教員に関心のある人々への演劇フォーラムとして、2024年3月10日に仙台青葉公園、緑彩館にて行った。参加者は県外、山形からも参加者がおり、市内の高校教員、その他教育に関心のある市民、更には仙台子供財団の理事に就任した湯浅誠氏と虫明元が対談を行った。孤立孤独とアートによる防止の可能性を参加者と深めることができた。

■実施項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤独化防止推進

◎中項目4-1 演劇的手法を用いた包摂的コミュニティの醸成と支援

リスニングアワーの活動をニーズのある教育機関やコミュニティに広める活動を開始した。実施にはプレバックシアターとの連携により、リスニングアワーを通して、他地域の学校やコミュニティでリスニングアワーを用いて人とのつながりを醸成しようとしているグループに対して、リスニングアワーを支援することで活動を他地域へ拡大した。





アンケートに協力していただいた参加者57名の分析から、優位に前後で孤独感が低下することが判明した。さらに、同時に行った各種の因子との孤独感変化との相関を分析したところ、社会関係資本のうち対面でのブリッジ因子、社会効力感、またもともと持っていた孤独感の大きさ、社会関係資本の対面でのボンド因子に応じて低下することが判明した。むしろ、孤立因子の知人交流、家族交流が高い人は、孤独感の変化は増加傾向になっていた。このことから、リスニングアワーは、孤立しがちの人ほど孤独感低下に貢献することが判明した。

◎中項目4-2 演劇的手法を用いた教育関係コミュニティの醸成と支援

本小児精神神経学会において、愛着とメンタライゼーションというテーマで、プレイバックシアターのグループが行っている、演劇的手法を用いたいじめ防止対策の実践報告と、脳科学的な立場でのそのような活動の意義を、学会参加者（医師、教育関係、保健師、看護師等）に講演した。また公演のデモンストレーションも行った。高校では、宮城県仙台南山高校、宮城県東松島高校、宮城県仙台第一高等学校高校、仙台育英学園高等学校を中心に、演劇的手法の授業を各校でのカリキュラムの一環として組み込めるように支援を進めた。

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 大学における孤立・孤独の現状と関連する多次元指標との関係性はなにか？

回答文：学年進行では、医学部1-6年生、保健学科1-4年生で、学年上がるほど、孤独感高まる傾向と、交流の度合いの低下すなわち孤立傾向が上がる傾向が認められた。ただし、標準偏差も学年進行で大きくなるので、個人差が大きくなると思われる。

Q2. 演劇的手法にはどのようなものがあり、グループの孤立・孤独と関連する社会情動性の指標にどのような効用や変化が認められるのか？

回答文：連携したアーティストにより効用効果に特徴がある事が判明した。具体的にはプレイバックシアター、PLAY ART! せんだい、里見氏、庄崎氏、それぞれに特徴が認められた。すなわち、聾啞の演劇家の庄崎氏のワークショップでは、ノンバーバルコミュニケーション、身体表現が強調され、学生コメントからもそれが反映していた。里見氏は即興ダンスの手法で、器具を使いながらも、基本的には言葉を使わないで演技をおこない、ノンバーバルコミュニケーションないしはインプロビゼーション・ダンスという即興的な身体表現が実践内容に含まれていた。

PLAY ART! せんだいは、さまざまなシアターゲームを組み合わせてつづも、対象の学生や学校の先生とのプレコンサルテーションを行い、グループ創作などを行い、グループ内での合意形成のためのコミュニケーションを通して、互いに関係性を深める効果があった。プレイバックシアターでは、参加者の経験した話を聴き、即興で演技するという一方で、互いに自分自身の経験を聞いたあと、何の段取りもなく即興で行うことは難しいが、短い時間で互いの経験を共有し合うことで、参加者の関係性が築かれた。またリスニングアワーでは、5-6人が遠隔で集まり、自分の経験談を互いに話しをする。特徴としては何の判断分析すること互いに傾聴し、また自分の話をする中で、自己開示が徐々に進み、しかも最後のガイドの振り返りで、参加者の話が、一つのストーリーとして語られる。参加者は互いの話を通してする点で特徴的であった。演劇的手法と行っても、ノンバーバルで身体的な活動と、逆に身体表現を持たないストーリーだけの活動と幅があることが、種々の手法を取り入れて理解できた。

コミュニケーションには、バーバルとノンバーバル2つの側面が重要であり、それぞれを特に強調して経験することで、その両者の特徴や重要性を学生はよく理解できたようであった。

Q3. リスニングアワーと呼ばれる、各自の経験を話す遠隔での活動の孤立・孤独への影響はどのようなものか？

回答文：リスニングアワーは、家族交流、知人交流の少ない人ほど孤独感低下がみられていた。また、社会関係資本のうち対面でのブリッジ因子、社会効力感、またもともと持っていた孤独感の大きさ に応じて効果があることも判明した。このことから、孤立しがちな人へのリスニングアワーの実践は、孤立・孤独防止に貢献すると期待できる。

Q4. 演劇的手法の教育を受けた人の長期的な変化はどのようなものがあるのか？

回答文：特に集中して演劇ワークショップを受講した学生の長期的変化をみるとまえに継続的に集まっている。その中で、授業で身につけた技法を用いた交流会を持つことを計画した。後輩、市内の高校、香川県の医療保健大学との演劇的手法を用いたワークショップは、比較的同年代に近いこともあり大変効果的であった。教員-学生の関係でのワークショップから 学生-学生の関係のワークショップに移行することで、より同年代に共感できる点で望ましいと感じられた。

Q5. 教育現場に演劇的手法を取り入れていくときの、演劇というイメージが教員等の抵抗を生むボトルネックは、どのようにすれば解決できるのか

回答文：東松島での継続的な活動では、当初はお試しのような形での特別イベントとしての導入であったが、その後、授業の中での演劇的ワークショップとなり、継続的な効果に教員たちも次第に実感を得ているようであった。

Q6. AI等の新しい技術は対面での演劇的手法の学びとは違う、ないしは、互いの連携でできる学びになりえるのか？

回答文：PLAY ART!せんだいのメンバーの中に、大規模言語モデルを用いた、AI教育に関するソフト開発者がおり、定期的に交流している。またメタバースを用いた教育の仕組みにも取り組んでおり、まだこれらは、具体化していないが、開発・実装化できる可能性があると思込んでいる。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

当該年度の研究開発の総括

【プロジェクトの達成目標に対する現在の進捗状況】

○当初の予定より進んでいる点：

大学、一般での演劇的手法の実践の場は増加してきており、またその孤立・孤独への効果に関する統計的なデータが積みあがってきている。特にリスニングアワーの全国展開や他大学からの参加者、ないしは出前ワークショップでの複数大学とのワークショップは成果があった。またマスコミ等での紹介が、新聞、テレビと続き、また湯浅誠との演劇フォーラムでの対談も、多くの方の関心を引き反響があった。国際尺度のBEVIの導入は、孤立孤独と教育強化に関して、グローバルに展開する可能性が広がった。

Jonathan Foxとの英語でのワークショップを仙台で実施し、さらに議論できたことは有意義であった。また湯浅誠氏との対談も、演劇的手法と子供たちの貧困問題や孤立孤独の問題と結び付け、多様性、公平性、包摂性を実現する社会にするかなど、示唆に富む対話ができ、その後も反響もあったことは評価できる。

○遅れている点：

実践の場は増えたが、JSTの開発期間終了後のプロジェクトの自律的な継続体制に関しては、それぞれの連携している演劇家、PLAY ART!せんだいが社団法人化したり、スクールオブプレイバックシアターが株式会社化したりと、これまでの任意団体から一段の飛躍があったものの、まだ安定した体制作りには時間がかかっている。

【各実施項目で得られた結果や成果を俯瞰・統合した結果分かったこと】

当初演劇的手法が、孤立孤独への予防に焦点化して、評価しようとしていたが、国際尺度での評価や、関係者とのワークショップやミーティングを繰り返す中で、次第に演劇的手法は、当初考えたものより広い教育的効果があることが判明してきている。さらにはウェルビーイング、やDiversity, Equity, Inclusion等の価値観への影響も期待でき、身体—心理—社会的な人としての教育効果も期待できると感じている。

・当該年度に明らかになった次年度に向けての課題とその解決方法の検討

リスニングアワーも含めた拡大された演劇的手法での活動をより多くの人に知ってもらうための取り組みが必要である。書籍化やシンポジウム等での展開を検討している。

2-5. 会議等の活動

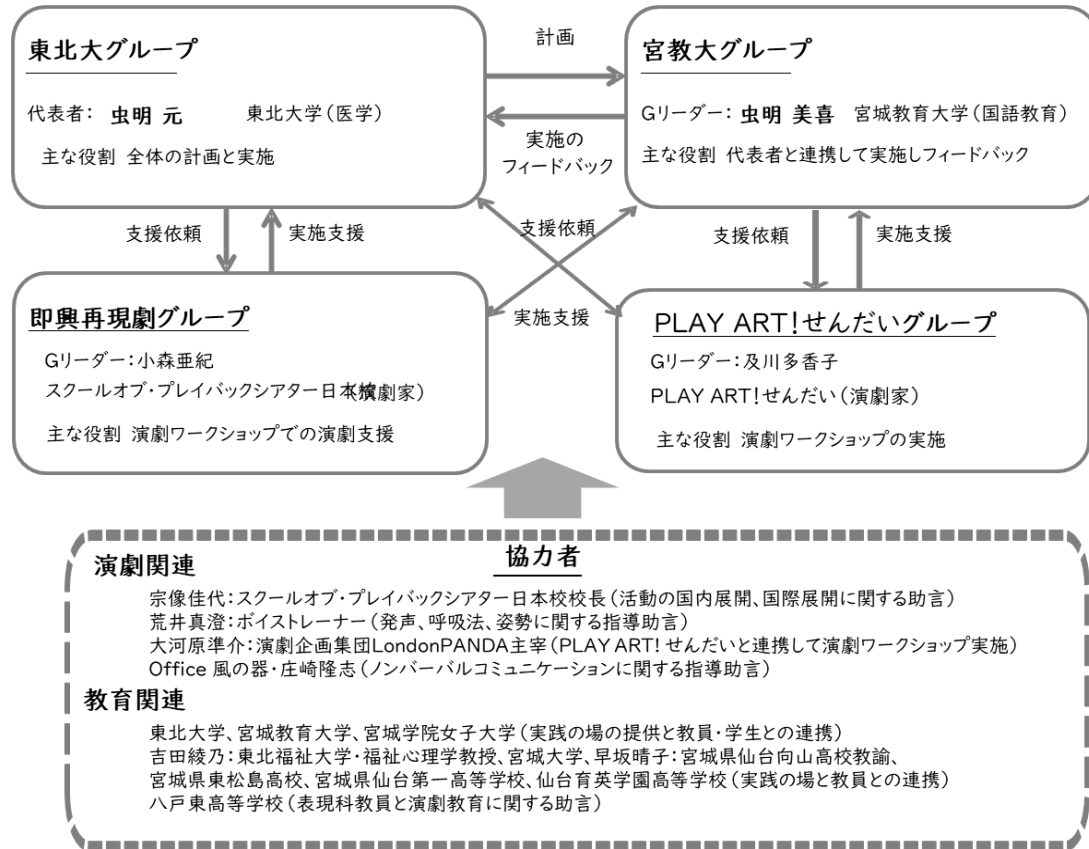
年月日	名称	場所	概要
2023/4/6	演劇的手法のPJ内ミーティング	県民会館リハーサル室	年度の方針確認と練習
2023/4/28-4/30	演劇的手法のPJ内ミーティング	川内萩ホール会議室	Jonathan Fox氏のワークショップの準備と練習
2023/5/24	演劇的手法のPJ内ミーティング	東北多文化アカデミー	Jonathan Fox氏のワークショップの振り返り
2023/5/28	演劇的手法のPJ内ミーティング	県民会館リハーサル室	演劇的手法の練習とミーティング
2023/7/8	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2023/8/26	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2023/9/9	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2023/10/14	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2023/12/3	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2023/12/20	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/1/14	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/1/18	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/1/30	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング
2024/2/25	演劇的手法のPJ内ミーティング	星陵地区セミナー室	演劇的手法の練習とミーティング

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

リスニングアワーの活動が、特に孤独感低下に有効であることが示唆されているので、これをさらに活用・展開するのにメタバースや大規模言語モデルchat GPT等を用いた、デジタル技術を用いた実践を検討している。まだアプリケーションとしては、評価できる段階ではなく、関係者との定期的なミーティングと施策を繰り返している段階であるが、将来有望であると考えている。特に不登校や、対面でのワークショップに抵抗のある参加者を包摂することが期待される。

孤立孤独と関係の深い社会情動スキルの評価は、BEVIとよばれる国際尺度の利用により、よりグローバルな評価や教育活動との評価ができる可能性を模索している。実際にBEVIでの教育活動の評価は日本の大学等でも拡大しており、継続的にBEVIの教育利用をしている他の教育機関とも連携していく可能性を模索している。

4. 研究開発実施体制



(1) 東北大学グループ (虫明 元)

東北大学大学院医学研究科

項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

東北大を中心に、学生に対して演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する (中項目1-1)

項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

社会情動スキルの観点から孤立・孤独の評価と原因を解明する (中項目2-1)。

項目3：コミュニティを指向した教育実践者・ファシリテーターの育成

東北大を中心にコミュニティの指向を持った実践者の育成を行う。演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する。(中項目3-1)

項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤独化防止推進

即興再現劇の全国のネットワークを活用し、ニーズのあるコミュニティへ演劇家とのパフォーマンスを行い、同時にそのためのファシリテーターになる人材を育成する。(中項目4-1) プロジェクトにおける本グループの位置づけ

宮城教育大学、即興再現劇チーム、PLAY ART! せんだいと連携して実施する。

(2) 宮城教育大学グループ (虫明 美喜)

宮城教育大学国語教育

項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

宮城教育大を中心に、学生に対して演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する (中項目1-2)

項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

社会情動スキルの育成方法と孤立・孤独の評価とを関連付け原因を解明する (中項目2-2)。

項目3：社会情動スキルを持った教育実践者の育成

スモールスタートでは宮城教育大を中心に希望する学生や、若手教員を中心に、演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する。その後本格研究では教育関係のコミュニティでの実践者の育成を行う (中項目3-2)

項目4：演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成と支援による孤独化防止推進

演劇的手法を用いて教育関係コミュニティの醸成と支援をおこなう。(中項目4-2)

5. 研究開発実施者

東北大グループ (リーダー氏名: 虫明 元)

研究代表者 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
虫明 元	東北大学 医学部	教授	20%	統括／企画検討ワークショップの設 計・実施
研究実施者 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
大城 朝一	東北大学医学部	助教		実施支援と特性評価分析
渡辺 秀典	東北大学医学部	助教		実施支援と特性評価分析
梶田祐貴	東北大学医学部	助手		実施支援と特性評価分析
研究補佐員	東北大学医学部	事務員		実施支援と特性評価分析

宮教大グループ (リーダー氏名: 虫明 美喜)

グループ リーダー 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
虫明美喜	宮城教育大学	客員准教授	20%	企画検討ワークショップの設計・実施
研究実施者 氏名	所属	役職 (身分)	エフオ ート	役割
津田 智史	宮城教育大学	准教授		事後コメント等の質的分析・評価
松崎 丈	宮城教育大学	教授		学内外ワークショップの計画・実施・ 評価への協力

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2023年4月 28-30日	Jonathan Fox氏の “自発性 “ワークショップ”	プレイバックシアター 日本校	仙台萩ホ ール	24名	演劇的ワークショップ と意見交換
2023年5月 2-4日	Jonathan Fox氏のワーク ショップ	プレイバックシアター 日本校	上大岡市 ウィング	24名	演劇的ワークショップ と講演会、意見交 換
2023年8月 2-4日	プレイバックシアター コアトレーニング	プレイバックシアター 日本校	仙台萩ホ ール	24名	演劇的ワークショップ と意見交換
2023年11月 25日	第130回日本小児精神 神経学会学術集会	プレイバックシアター 日本校	高松市	80名	プレイバックシアタ ーの実演と講演
2024年2月 16-18日	香川県保健医療大学 ワークショップ	香川県保健 医療大学	高松市	30名	若手中心に演劇的手 法の合同ワークショ ップと意見交換
2024年3月 2-4日	プレイバックシアター ST・コンダクティン グ	プレイバックシアター 日本校	東北大学 青葉山コ モンズ	20名	演劇的ワークショップ と意見交換
2024年3月 9-11日	プレイバックシアター コアトレーニング	プレイバックシアター 日本校	東北大学 青葉山コ モンズ	20名	演劇的ワークショップ と意見交換
2024年3月 10日	PLAY ART! せんだい 演劇教育フォーラム	PLAY ART! せんだい	仙台緑彩 館	80名	虫明 元 講演 湯浅 誠氏と孤独孤 立とアートの可能性 を対談する

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- 人を動かすナラティブ 大治 朋子 5章担当虫明 元 毎日新聞出版 令和05年06月01日
- 認知症ケアに活かすコミュニケーションの脳科学20講 一人のつながりを支える脳のしくみ 虫明 元, 山口 晴保 協同医書出版社 令和05年07月01日
- ひらめき脳 虫明 元 青灯社 令和06年01月30日

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・東北大学 生体システム生理学分野 <http://www.neurophysiology.med.tohoku.ac.jp/>

(3) 学会 (6-4. 参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (____件)

●国内誌 (____件)

・なし

●国際誌 (____件)

・なし

(2) 査読なし (____件)

・なし

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議____2件、国際会議____1件)

- ・Hajime Mushiake Dynamic neural representation of actions in frontal cortices Symposium Tohoku - KU Leuven 令和05年06月06日 ベルギー開催
- ・虫明 元 PLAY ART! せんだい演劇教育フォーラム「演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業」からの報告 2024年3月10日 仙台市 青葉山公園 仙臺緑彩館
- ・虫明 元 湯浅 誠 公開対談 「孤独孤立とアートの可能性」 2024年3月10日 仙台市 青葉山公園 仙臺緑彩館

(2) 口頭発表 (国内会議____1件、国際会議____0件)

- ・虫明 元 脳科学的観点からいじめ当事者のナラティブを考える 第130回日本小児精神神経学会学術集会 2023年11月25日 香川県高松市

(3) ポスター発表 (国内会議____1件、国際会議____0件)

- ・梶田 裕貴、高林 健人、虫明 元 幼少期母子分離ストレスは時期及び性によって異なるうつ様行動を引き起こす 日本神経科学会 2023年8月3日(木)

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (____3件)

- ・毎日新聞 朝刊1面と3面 令和05年09月16日 孤独が生み出す依存心
- ・「移民が仕事を奪う」SNSで怒りや不安あおり世論 誘導…米大統領選での手法を内部告発 読売新聞オンライン 2023年12月12日 インタビュー
- ・河北新報夕刊令和06年04月08日 「PLAY ART! せんだい」演劇教育事例報告 孤立・孤独防止に効果 2024年3月10日 仙台市 仙臺緑彩館イベントへの報道

(2) 受賞 (____0件)

(3) その他 (____2件)

- ・カズレーザーと学ぶ 「孤独」日本テレビ2023年12月19日
- ・認知症の世界 NHK 2023年12月

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (____0件)

(2) 海外出願 (____0件)